

歯科教育審議会に於いて決定せる教授要綱*

谷津三雄** 弓削朝子*** 坂本嘉久** 金子守男**

要 旨

連合軍から昭和21年4月15日に歯科教育審議会の設置を指示された。それにもとづき決定された「昭和22年歯科教育審議会に於いて決定せる教授要綱」を資料とし、戦後の日本歯科教育を運命づけた「標準学科課程」の別表を中心に述べた。

(キーワード)

歯科教育審議会, 歯科医学史, 畑 謹吾, 川上 為次郎, 第5回歯科医師国家試験

はじめに

日本歯科医師会編, 日本歯科医事衛生史第1巻(昭和44年5月刊)¹⁾ 第4編, 歯科教育の第2章, 歯科教育審議会に「歯科教育の向上に関する施策を審議するため, 連合軍から昭和21年4月15日歯科教育審議会の設置を指示され設けられた。同審議会は歯科医学専門学校長8人, 同教授6人, 日本歯科医師会長, 同会役員3名, 開業歯科医師5人で組織したとあり, その報告書(其1)(昭和21年9月)によると, その第5回総会が昭和21年8月27日, 総司令部において開会され, その特別委員会で学科課程, 教授法, 教授団, 教科書などに関し審議を進めた。それにもとづき教授法協議会がもたれ, 昭和21年10月7日午後1時半に

「歯科臨床諸科目及口腔衛生学教授法協議会」が東京医学歯学専門学校に各校各科主任教授の参集を乞ひ, 第1回総集会を開き委員長及幹事の選挙を行ひ, 審議の必要上, 放射線学, 歯科保存学口腔治療学, 口腔外科学麻酔学, 歯科補綴学, 歯科矯正学, 口腔衛生学の6部会を設け, 選挙により部会委員長を決定した。各部会はそれぞれ会合し, 協議を進め(通計29回)各科目の教授要綱案を編成し, 昭和21年12月24日第2回総集会において放射線学, 歯科保存学口腔治療学, 口腔外科学, 歯科矯正学及口腔衛生学の各教授要綱を決定し, 昭和22年3月28日に第3回総集会を開き, 麻酔学及歯科補綴学の各教授要綱を決定し, 何れも本審議会に報告された。又, この教授要綱と相並んで各科の臨床実習指導指針を作成せんがため, 臨床実習協議会を設け, 先ず各科目毎に質疑要綱を各校主任教授に送って責任ある回答を求め, 之を基礎として協議会を開いた。歯科保存学及口腔治療学と, 歯科補綴学はそれぞれ2回, 口腔外科学麻酔学, 放射線学, 歯科矯正学は各1回開会, 其等の会談に各校の教授以下助手等数氏が来会され, リジュレー中佐は毎回出席, 熱心なる指示を与へられた。其結論を基として, 教授法協議会各部において指針案を編み, 昭和21年12月24日, 同22年3月28日の2回に亘り総集会を開いて之を決定し, 本審議会に勧告された。教授法協議会の成案は歯科教育将来の方向を示すものであって, 裨益する所大なるものあるを信ずるものである」と昭和21年9月から同22年4月15日に至るまでの間の記録をまとめた報告書(其2)昭和22年5月刊に記されている。しかし, その時決定された教授要綱がいかなる内容のものであったかについては記

* The Outline Decided in the Council of Dental Education

** Mitsuo YATSU, Yoshihisa SAKAMOTO, Morio KANEKO, Nihon University School of Dentistry at Matsudo 日本大学松戸歯学部

*** Asako YUGE, Kanagawa Dental College 神奈川歯科大学

表 1 標準学科課程

学科名	番号	科目	講義	実習	小計	合計
	1	歯科学概論 Orientation in Dentistry	16		16	16
基礎 学 科	2	解剖学 Anatomy	64	192	256	384
	3	口腔解剖学 Oral Anatomy	32	96	128	
	4	組織学（胎生学ヲ含ム） Histology (Embryology inclusive)	32	64	96	192
	5	口腔組織学 Oral Histology	32	64	96	
	6	生理学 Physiology	64	96	160	192
	7	口腔生理学 Oral Physiology	32	—	32	
	8	生化学 Physiological Chemistry	48	64	112	112
	9	病理学 Pathology	48	64	112	192
	10	口腔病理学 Oral Pathology	48	32	80	
	11	薬理学 Pharmacodynamics	32	64	96	128
	12	歯科薬物学 Dental Materia Medica	16	16	32	
	13	細菌学 Bacteriology	48	64	112	144
	14	口腔細菌学 Oral Bacteriology	16	16	32	
	15	歯科理工学 Dental Technology	32	64	96	96
臨床 学 科	16	内科及診断学 Internal Medicine and Diagnosis	112	—	112	112
	17	外科学 General Surgery	112	—	112	112
	18	隣接臨床医学 Clinical Medicine Closely relating Dentistry	96	—	96	96
	19	放射線学 Radiology	16	16	32	32

表 1 つづき

学科名	番号	科 目	講義	実習	小計	合計
臨 床 学 科	20	歯科保存学 Operative Dentistry	64	176	240	320
	21	口腔治療学 Oral Medicine	32	48	80	
	22	口腔外科学 Oral Surgery	96	—	96	112
	23	麻酔学 Anesthesia	16	—	16	
	24	歯科補綴学 Prothodontics	160	448	608	608
	25	歯科矯正学 Orthodontics	48	64	112	112
	26	総合歯科臨床示説 Assembling Clinica Demonstration in Dentistry	64	—	64	64
衛 生 社 会 学 科	27	栄養学 Nutrition	16	—	16	16
	28	衛生学 Personal and Public Hygiene	32	—	32	80
	29	口腔衛生学 Oral Hygiene	32	16	48	
	30	医事法制及社会歯科学 Medical Jurisprudence, Social Relation of Demistry	16	—	16	16
	31	歯科経済学 Dental Economics	16	—	16	16
	32	学術修辭学 Technical Composition	16	—	16	16
	33	歯科医学史 History of Dentistry	16	—	16	16
	34	臨床実習 Clinics	—	1296	1296	1296
総 計			1552	2928		4480

されていない。そこで著者らの1人弓削の旧蔵本で現谷津が所有する「昭和22年歯科教育審議会に於いて決定せる教授要綱」²⁾を資料とし、戦後日本における新しいアメリカ歯科医学の導入による歯科医学教育の一端を報告したい。

資料と考証

昭和22年歯科教育審議会に於て決定せる教授要綱²⁾

本書は23×15 cm の謄写版刷り縦書きの95ページで、2ページに「標準学科課程」の2枚の折

り込みが挿入されている。本冊子の1ページは、5、学科課程

別表ハ3年制ノ予科ヲ設クル4年制歯科医学校ノ標準学科課程案デアッテ、各校ハ其ノ特色ヲ生カスタメニ、各科目配当時間ヲ若干増加シテモ宜シイ。科目ヲ削除シ又ハ各科目時間数ヲ減少スルコトハ出来ナイ。

各学年ノ授業ハ32週、各週35時間トシ計1120時間、4箇年総合計4480時間トスル。

予科ヲ設ケナイ歯科医学校ハ、公民、英語、数学、物理、化学、生物等ノ普通学科並ニ体育ヲ課スルタメ、総時間数ノ10%即チ448時間ヲコレニ充テ別表科目毎ニ約10%宛時間数ヲ減少スル。但シ現況ニ鑑ミ各学校ニ於テ嚴重ニ本規定ニ準拠スルコトノ困難ナルヲ認ムルモ出来得ル限りコレニ則ランコトヲ希望スル。但シ第3学年後学期ノ臨床実習ハソノ半ヲ臨床示説ニ振り向ケテモ宜シイ。

将来各学科ノ名称ハ別表ニ揚グル通りトスル。とあり、この別表とは「標準学科課程」の2枚折り込みを示している。しかし、日本歯科医事衛生史第1巻¹⁾481ページに「別表は3年制の……将来各学科の名称は別表に揚げる通りとする」と同文で記されているものの最も重要な別表の記載はない。

また、5、学科課程とは「歯科教育の向上に関する事項」の1、歯科医学校入学資格2、入学試験3、生徒定数4、共学制度5、学科課程6、教授法7、教科書8、教授団9、校地10、校舍11、附属医院12、図書館13、学校の経営のうちの5、学科課程の内容をさしている。

そこで最も重要な別表の全文についてあげると次のとおりである。

このように基礎学科は1. 歯科学概論2. 解剖学3. 口腔解剖学4. 組織学(胎生学ヲ含ム)5. 口腔組織学6. 生理学7. 口腔生理学8. 生化学9. 病理学10. 口腔病理学11. 薬理学12. 歯科薬物学13. 細菌学14. 口腔細菌学15. 歯科理工学。臨床学科は16. 内科及診断学17. 外科学18. 隣接臨床医学19. 放射線学20. 歯科保存学21. 口腔治療学22. 口腔外科学23. 麻酔学

Anesthesia 24. 歯科補綴学 25. 歯科矯正学 26. 総合歯科臨床示説。衛生社会学科は 27. 栄養学 28. 衛生学 29. 口腔衛生学 30. 医事法制及社会歯科学 31. 歯科経済学 32. 学術修辭学 Technical Composition 33. 歯科医学史 History of Dentistry そして 34. 臨床実習となっている。しかし、歯科医学史についての教授要綱の説明はなく、ただ口腔衛生学教授要綱(昭和21年11月18日)の(五)他学科トノ關係に「本科目ハ栄養学、衛生学、社会歯科学、学術修辭学ト密接ナ關係ガアル。相互ニソノ内容ヲ活用スルト共ニ重複シナイヨウニ充分注意スベキモノデアル。栄養学、衛生学共ニ実習ヲ伴ツテイナイカラ本科目ニオイテコレ等ノ実習ヲモ併セテ行ウコトヲ必要トスル。歯科医学史ノ講義トモ重複シ易イカラ注意シナケレバナラナイ」とあるにすぎない。

そして、講義にあてられる時間は16時間で、この歯科医学史の時間は歯科学概論、歯科薬物学、口腔細菌学、放射線学、麻酔学、栄養学、医事法制及び社会歯科学、歯科経済学、学術修辭学と同じ時間である。なお、今日の歯学史でなく歯科医学史であった。このことは、「別表ハ3年制ノ予科ヲ設クル4年制歯科医学校ノ標準学科課程案デアッテ、各校ハ其ノ特色ヲ生カスタメニ云々」また「予科ヲ設ケナイ歯科医学校ハ、公民、英語、数学、物理、化学、生物等ノ普通学科並ニ体育ヲ課スルタメ、総時間数ノ10%即チ448時間ヲコレニ充テ云々」とあり、前文は旧7年制の歯科大学の専門課程を、また後文は当時4年制の歯科医学専門学校が存続していたことから、この両者を考慮したためと考えられる。なお、印刷所は裏表紙に古屋膳写堂と記されている。また、表紙に「東京市世田谷区奥澤1丁目317番地 畑 謹吾 電話田園調布3465番」と捺印されている。おそらく畑 謹吾氏が、本書を最初に所有していた人物であったと考えられる。

日本歯科医師会雑誌第1巻第1号(昭和23年11月20日発行)³⁾73ページ、歯科教育審議会発足の項の「8月30日 歯科教育審議会委員委嘱

学校協会側：高橋新次郎(医歯)、杉山不二(東歯)、入交直重(東洋)、鈴木 勝(日大)、吉崎

誓信（大阪）

国家試験委員側：河村 弘，西崎忠義，大橋二郎，畑 謹吾，長谷川慶蔵

開業医側：青木貞亮，佐藤 重，西山幸夫，加藤 弘，真鍋満太。

なお，委員長には高橋新次郎氏が決定。顧問奥村鶴吉氏，囑託榎 恵氏 決定。」とあり，畑 謹吾氏は国家試験委員であり歯科教育審議会委員であったことを知る。

また，日本歯科医師会雑誌第1巻第5号（昭和24年4月20日発行）⁴⁾ 224ページ，資料の項に，歯科医師国家試験委員名（24.2.1）に東京都世田谷区奥澤1の327畑 謹吾とあるが，本資料の捺印の住所は1丁目317番地であることからこちらが正しいと思われる。また231ページに，第5回歯科医師国家試験擔當科目通知に関する件が医発第167号，昭和24年2月25日厚生省医務局長から日本歯科医師会長佐藤運雄殿宛の通知書に，甲組 日本大学歯科，乙組 日本女子の両校の実地試験担当者にその名を見ることができ，また，第5回歯科医師国家試験学説試験には開業医側委員として補綴を担当したことが記されているが，さらに本人物については詳細な考証が必要と思う。なお，著者らの一人谷津は，昭和24年度の第5回歯科医師国家試験合格者であることを考えると感慨無量である。

結 び

川上為次郎著，歯科学史提要（国際出版株式会社発行，昭和24年7月刊）⁵⁾の回想一序にかえて一の項に「私は大震災後に復興した日本大学歯科に出講することになったが，佐藤歯科長の格別なる好意によって私の好きな科目で講義してよいといふ許しを得たので，口腔衛生と歯科学史をやらしてもらった。歯科学史はその頃の日本ではまだ歯科医学専門学校の課程表の中に加わっていないために，文部当局への気兼ねもあって公然と時間割に現出することができない。いはばモグリの科目であるから口腔衛生の時間表の中で若干やることにしてあった。私としてもはじめての試みであるから，歯科学史を片端から読んでエピソードの数々

をひろって講述したのであった。開講後7～8年経って昭和6年に草稿を整理して，拙著歯科医学史を刊行した。その後も引続いて日本大学歯科学生諸君に20余年の間，歯科学史を講述して来た。

しかるに第二次世界大戦後，昭和21年に歯科教育審議会が生れて，学科目編成に大改革が行われたとき，歯科学史は正科に組込まれた。内密の教育を20年余りも私のために続けさせてくれた日本大学歯科には多大の感謝をすると同時に，擔任者の私としては天日を見る思いになった。新なる講座として東京医科歯科大学専門部と日本女子歯科医学専門学校に歯科学史を受持つ光栄さへも恵まれた。まことに感慨無量と申したい次第である。

そこで歯科学史が歯科医学校の正科となったからには，手頃の教科書の必要が起って来たので，新たに稿を起すことにした。私の旧著の歯科医学史は戦災後は絶版になっているから，現今の時世に適應するやうにアメリカの歯科事情などを若干補筆し，紙数もできるだけ節約してテーラーやボードホッフにならって教科書向に編集したのがこの歯科医学史提要である。」から，本教授要綱にそった最初の成書と言える。

なお，著者らの一人谷津は，日本大学専門部歯科の第4学年在学中（昭和23年）の10～11月頃に付属病院の臨床講堂において，数回川上教授より歯科医学史の講義を聴講した。しかし，昭和24年3月25日に卒業したので，本書を使用していない。川上教授は，本書出版の翌昭和25年に没しているので，本書を使用しての講義は，昭和24年度の後期の授業のみでなかったかと推察される。なお，川上教授は昭和6年に「歯科医学史」⁶⁾の名著を刊行しており，教授要綱と同じ名称を書名としているが，その教授要綱にしたがって発行したものに「歯科学史提要」とした意図はどこにあったのであろうか。

本資料は，第16回日本歯科医史学会総会において中原 泉教授が，文部省，国立国会図書館にも所蔵されておらず稀覯本であり，歯学史資料として貴重であると発言されている。本資料が発行された昭和22年頃は，敗戦と同時に軍需工場はいっせいに首切りを行い，また復員軍人や外地からの

引揚者を加えて1,000万人以上の者が失業，食料配給制度は崩潰し買い出しが盛んになるなど，急角度で上昇するインフレのなか，国民生活は混乱と虚脱に陥り，極度の貧窮生活のもとにあえいだことを考えると，おそらくその発行部数は少なく，当時燃えるものの大部分は燃料に使用したりした当時をしのぶと，本資料が残っていたことはまさに奇跡に近く，日本歯科教育学史上貴重である。

文 献

- 1) 日本歯科医師会編：日本歯科医事衛生史，第1巻，478-488，昭和44年5月。
- 2) 昭和二十二年 歯科教育審議会に於いて決定せる教授要綱。
- 3) 日本歯科医師会雑誌，第1巻第1号，73昭和23年11月20日発行。
- 4) 日本歯科医師会雑誌，第1巻第5号，224-232，昭和24年4月20日発行。
- 5) 川上為次郎：歯学史提要，国際出版株式会社，東京，昭和24年7月25日発行。
- 6) 川上為次郎：歯科医学史，金原商店，東京，昭和6年8月1日発行。